

芳野に遊ぶ

頼

杏坪

万人酔を買って芳叢を攪す

感慨誰能我同

恨殺す残紅の飛んで北に向う

延元陵上落花の風

【作者】頼 杏坪(一七五六〜一八三四年)(宝暦六年〜天保五年)・江戸時代後期の儒者。名は惟柔(これやす)、字は千祺(せんき)、通称は万四郎、

号は杏坪(あんず)、春草、杏はん(きょうはん)、杏翁等ある。頼 春水の末弟で山陽の叔父にあたる。安芸(現広島県)竹原に生まる。十八歳の時、兄春水を頼つて大阪に遊学、二十歳の時江戸に出て服部栗齋(りつさい)に学び、天明五年安芸の藩儒となり藩学の興隆につとめた。一方、山陽をよく庇護(ひご)し教育に力を注いだ。文化八年(一八一二)より郡奉行を兼ね敏腕をふるい名声をはせた。和漢の学に通じ、漢詩は春水と共に定評あり。纂評(さんびよう)春草堂詩鈔、芸備孝義伝、原古編の著書や、鹽古録(かんころく)の編纂、芸藩通志の編集等もある。更に唐桃集という和歌集もある。天保五年七十九歳で没した。

【語釈】\*萬 人…おおぜいの人。 \*芳 叢…花がたくさん咲いている草むら。 \*攪…かきまわす。 ふみつける。 \*恨 殺…はなはだしく

うらむ(殺は助字)。 \*残 紅…ちりのこつた花。 \*延元陵…後醍醐天皇の塔尾陵(とう)のおのみささぎ。

【通釈】吉野山に花見に来た多くの人々は酒に酔い、芳叢は荒らされている。南朝の昔を想つて自分と同じ感慨を抱く者は、この中に誰かいるだろうか。更に恨めしいのは、散り残つた花までが、北に向かつて飛んで、後醍醐天皇の御陵のほとり、風に散る花のうちに、しばらく立ちつくしているのがある。